



荒尾市立荒尾第四中の生徒は熊本日日新聞の「読者ひろば」へ投稿を続けています。平成 28 年度、同校に赴任した村岡英治教頭先生の発案。現在まで、数多くの生徒の意見や主張が投稿されています。

「話したいこと・伝えたいこと・主張したいことなど、生徒が思ったり感じたりしたことを素直に表現できる場をつくってあげたかった」と話す村岡教頭。そのために、同校教諭は皆、生徒たちが訴える姿を見逃すまいと常にアンテナを張って学校生活を見届けているそうです。「読者ひろば」への投稿が採用されると全校集会で紹介。生徒自らがパブリックスピーキング（演説・スピーチ全般。話し言葉をもそのままスピーチする方法）することで、全生徒の『聴く・受け入れる』姿勢につながっています。今では多くの生徒に、主体的かつ積極的な言動が見られるそうです。『立志式の誓い、誰にも優しく』という題名で投稿をした3年



平成 29 年 5 月発行

PANORAMA

の荒巻優さんは、「自分自身の経験をどのように書けば読む人にうまく伝えられるのかを考えたが文章にしました。多くの人に読んでもらいたい反響があったことで今後の励みになりました。これからは相手の立場になって考え、行動できる人を目指したい」と笑顔で話してくれました。四中の生徒たちは、相手意識や仲間意識も強くなり、お互いを理解し合うことのできる人間に成長しているようです。

村岡教頭は「この活動で保護者はもちろん、地域の方々にもありがたい言葉をかけていただくとよいになりました。生徒たちは未来のグローバル社会を生き抜いていかなければなりません。まずは地域の方々や意識や思いを共有できることで、将来の原動力につながってもらえればと考えています」と、先生自らが相手（生徒）の立場になって、先を見据えています。皆さん、読者ひろばの投稿を今後とも楽しみにしてください。（蔵本）



「読者ひろば」へはどなたでも投稿可能です。皆さんも思いや感じたことを投稿してみてください。たくさんの方の投稿をお待ちしています。

被災地を思い 毎日を大切に
前 紗菜 14 | 中学生
（鹿屋市）
4月16日、土曜日の日は誰かが眠れない夜だった。地震がくるんじゃないか、行方不明の方は見つかったのだろうか、いろんな事を考えた。あの日から1年、私はまた当たり前のように暮らしている。でもまだ自分家族がいない人、とくに左隣の家族は、当たり前前に

暮らしたくもならない。この1年間、私は被災地の上を歩きつづけてきた。被災地を毎日通った。どの家も壊れている。中には避難したまま避難所がある家もある。まだこんな状態に置かれてしまっている。私達の生活も、学校生活も、すべてこの状態で過ごしている。でも、被災地を毎日通った。どの家も壊れている。中には避難したまま避難所がある家もある。まだこんな状態に置かれてしまっている。私達の生活も、学校生活も、すべてこの状態で過ごしている。でも、被災地を毎日通った。どの家も壊れている。中には避難したまま避難所がある家もある。まだこんな状態に置かれてしまっている。私達の生活も、学校生活も、すべてこの状態で過ごしている。

平成 29 年 5 月 14 日に掲載された前田紗英さんの投稿（熊本日日新聞から）